

韓国併合（日韓併合）条約は1910年8月22日に調印され、同29日に発効した。併合100年を機に菅直人氏の首相談話が、過日発表された。往時の日韓関係についての事情を顧みることなく謝罪 자체を自己目的としているが」との談話であった。

謙虚で率直で勇気ある」とか

「当時の韓国人々は、その意に反して行われた植民地支配について、国と文化を奪われ、民族の誇りを深く傷付けられました。この植民地支配がもたらした多大の損害と苦痛に対し、ここに改めて痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明いたします」

「ここまで踏み込んでいいのか。談話はさうにこいつ。『私は、歴史に対して誠実に向き合いたいと思います。歴史の事実を直視する勇気とそれを受け止める謙虚さを持ち、自らの過ちを省みることに率直でありたい』と思います」

現在の価値観をもつて往時の日韓関係を眺め、「そういうことはあるべきではなかった」と考えることが、どうして謙虚で率直で勇

氣のあることなのだろうか。併合条約を有効だとする日本が、条約 자체を無効だと言い張る韓国に謝罪の言葉をいくら積み上げたところで、相手を満足させることなどできはしない。道義において自国がいかに劣っていたかを強調すればするほど、姑息と卑屈にみずからを深く貶めるだけである。現在の価値観で過去を論じることのかがわしさに、むづこのあたりで気がつかねばならない。

各国との合意による合法統治

李朝時代末期の韓国は、時に清國、時にロシア、時に日本と、周辺の大間に依存しよつという「事大主義」の傾向を強め、自立と近代化への展望を失って政争に明け暮れた。当時の韓国は清国と君臣関係（清韓宗属関係）にあり、韓国内で内乱が起ったときに清国に派兵を要請した。日本がこれを脅威と見立てたのは当然であり、清

## 現在の価値観で過去断罪するな

### 正論



拓殖大学学長

渡辺 利夫

韓宗属関係を断ち切るための戦争が日清戦争であった。

シベリア鉄道が完成してしまえば、ロシアが朝鮮半島の占領へと向かう可能性は十分にあった。当

時、ロシアは満州（中国東北部）に強大な軍勢を張っており、日本人の多くがロシアを「北の脅威」とみていた。ロシアによる朝鮮半島の占領は、すなわち日本の亡國の危機である。そうであれば併合化を助力し、2国との善隣関係を保ちながら「共に亜細亜を興す」（福澤諭吉）友邦たりえたとすれば、それに越したことはない。

日露戦争とは、ロシアの南下政

策に抗して、日本が韓国の「自由裁量権」を獲得しようとして戦つた戦争である。自由裁量権とはい

かにも「あけすけな」表現だが、弱者に「安住の地」がなかつた帝國主義時代の用語法である。

日本の韓国における自由裁量権は、ボーツマス条約でロシアにより、また日英同盟下のイギリスによつて認めたものである。日本は、本国で内乱が起つたときに清国に派兵を要請した。日本がこれを脅威と見立てたのは当然であり、清

うな、近代化へと向かう挙国一致の政治的凝集力が韓国の中から生まれてくる可能性を期待すること

本の韓国統治を承認するという桂・タフト協定を結んでいた。日本の韓国統治は幾重にも国際的に承認され、併合への道を阻止するものではなかつた。各国との合意によって開かれたのである。

近代化は日本の支援によって

韓国は日本の強圧によって結ばれた併合条約は無効だとするが、往時の韓国民の中にも自国の近代化を実現するより他なしと考える群の有力な人々が存在したことは指摘しておかねばならない。李容九、宋秉畯などをリーダーとする「一進会」に集つた人々である。

統監府の資料によつても参加者は14万人、実際には数十万人に及ぶ当時の韓国最大の社会集団であった。首相桂太郎をして併合を決意せしめたものが彼らによる合邦への要請であった。

しかし、いわゆる「一進会」に集つた議論を重ねても、併合条約が無効かの議論を日韓で一致させるとは期待できそうにない。ならば、語るべきは過去ではなく、現在と未来でなければならない。（わたなべ としお）